九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

アリストテレス『分析論後書』　第二巻第一章における εἰ ἔστι の問い

酒井, 健太朗
九州大学大学院人文科学府 : 博士後期課程

https://doi.org/10.15017/1685852

出版情報：哲学論文集. 52, pp.29-46, 2016-09-24. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

アリストテレス『分析論後書』第二巻第一章における εἰ ἔστι の問い

酒井　健太朗

はじめに

しばしば、アリストテレスの『分析論後書』（以下『後書』）の第二巻は探求論であると言われる。『後書』第一巻が完成した学の構造に関わる一方、第二巻は個々の学が何を探求するかに関わるからである。[1] 第二巻で彼は、主に月蝕や雷鳴のような自然事象を具体例として挙げる。

アリストテレスは『後書』の第二巻第一章を以下の言明から始める。

> 探求されるものどもは、われわれが知る（ἐπιστάμεθα）[2] ものどもと数において等しい。われわれは四つのことを探求している。すなわち、事実（τὸ ὅτι）、根拠（τὸ διότι）、あるかどうか（εἰ ἔστι）、何であるか（τί ἐστι）［の四つである］。（II 1, 89b23-25）[3]

探求されるものは、（a）τὸ ὅτι「Xという事実」、（b）τὸ διότι「Xの根拠は何か」、（c）εἰ ἔστι「Xがあるかどうか」、（d）τί ἐστι「Xは何であるか」、の四種類である。この四種類の探求対象は、（a）（b）と（c）（d）の二つの組に分けられる。というのも、アリストテレスは「事実を知る時にわれわれは根拠を探求する」（II 1, 89b34）と述べ、（a）の後に（b）を、（c）の後に（d）を探求することを明言するからである。四種類の問いのうち、（a）と（b）についてアリストテレスの述べていることは明快であり、解釈上の論争はほとんどない。他方、（c）と（d）の組、特に（c）は論争が多い箇所である。

本稿は、探求論における（c）の内実と探求プログラムにおける役割を明確にすることを目的とする。

本稿の構成は以下のようになる。第一節では、第二巻第一章–第二章のテクストを確認することで論争点を明確にする。さらに、探求プログラムを三つのレベルに峻別し、その中に（c）を位置づけることで問題の解決を図るUptonによる解釈を、（a）と（c）の区別と先後性テーゼとの整合性から検討する。第二節では、（c）が名指されたものが存在するかどうかを問うていることを明らかにすることで、（a）と（c）を区別する解釈を提示する。さらに第三節では、意味表示の問題を参照し存在把握の程度の差を示すことで先後性テーゼを保持する。最後に第四節では、（c）へ答える人と文脈に着目することで、中項問題を解決する。

1. 問題の所在とεἰ ἔστιの三段階説

第二巻第一章は、（a）の（b）への先行を、「太陽が蝕を受けている」という例を挙げ、事実を発見した後にその根拠を探求すると述べることで説明する（89b25-31）。その後、アリストテレスは（c）と（d）について以下のように述べる。

以上のことについてはこのようにして探求するのであるが、或ることについては別の方法でわれわれは探求する。たとえば、ケンタウロスや神はあるのかあらぬのか。端的に（ἁπλῶς）あるかあらぬとかいうことを私は言っており、白くあるか白くあらぬかということではない。それがあると知るときに、「何であるか」をわれわれは探求する。たとえば、「神とは何であるか」とか「人間とは何であるか」を探求する。（II 1, 89b31-35）

（a）（b）と（c）（d）は探求の方法が異なる。（a）は「S（主語）がP（述語）であるか」、（b）は「SがPであるのは何ゆえか」という形式で探求されるのに対し、（c）は「Sがあるかどうか」、（d）は「Sは何であるか」という形式で探求される。（c）は「端的に」あるかどうかを探求し、白くあるかどうかを探求しているのではない。（c）は（d）に先行する。

探求の順序について述べた後、アリストテレスは四種類の探求の内実を第二巻第二章にて考察する。そこでは、（a）と（c）においては中項があるかどうかが探求されること、（b）と（d）においては中項が何であるかが探求されることが明らかとなる。さらに、事実は部分的に（ἐπὶ μέρους）あること、あるかどうかは端的に（ἁπλῶς）あることが規定される。「月が蝕を受けているか」や「月が満ちつつあるか」という例から、部分的にあることが主語と述語の関係の探求、「月があるかどうか」や「夜があるかどうか」の例から、端的にあることが主語のあるかどうかの探求であることが定められる（II 2, 89b37-90a5）。

以上のことを明らかにした後、アリストテレスは四種類の探求すべてが中項の探求であると主張する。

それゆえ、どの探求においても、中項があるかどうか、あるいは中項が何であるかを探求していることになる。というのも、中項とは原因（αἴτιον）であり、どの場合においても原因が探求されるからである。（II 2, 90a5-7）

すべての探求において中項が探求される。なぜならば、探求においては原因が探求され、原因は中項と同定されるからである。原因があることを知った後、その原因が何であるかを探求することになる。

しかし、以上のテクストは解釈上の問題を含む。アリストテレスはこのテクストにおいて、（a）-（d）のすべてのタイプの探求において中項が探求されると述べている。（a）と（b）で問われているのはSとPの関係であるため、そこではSとPを繋ぐ中項が探求される。（d）では、すでに存在が明らかになった中項の特定が行われる。問題は、（c）においても中項が探求されることである。Sと「ある」の間に中項があると解することは、たとえば月蝕と「ある」の間に中項があると解することは難しい。

（c）のこの中項問題を解決するため、Uptonは（c）が内部に日常的レベル、学的レベル、形而上学的レベルの三つの段階を持つとみなすことで、説得的な議論を展開している[4]。

まず、Uptonは（c）が学の適切な主語へ向けられ、その主語とは『カテゴリー論』における種としての人間を代表とする第二実体であると述べる。Uptonによれば、『後書』におけるアリストテレスの目的は第二実体の因果的定義の知識の獲得である[5]。

Uptonは次にOwenの論文'Aristotle on the Snares of Ontology'を参照する。Owenは「人間は存在するか否か」という問いへの答えを、(∃x) Fxと定式化する。つまり、（c）への応答は、「人間であるようなxが存在する」というものになる。Owen解釈に従えば、ケンタウロスを代表とする虚構的対象についての問いは、ケンタウロスを例化するものが世界に存在しないため答えられないことになる。つまり、「ケンタウロスは存在するか否か」と問われたら、「ケンタウロスを例化するxは存在しない」と答えることで、ケンタウロスが存在しないことが明らかとなる[6]。

UptonはOwenが日常的なレベルにおける（c）を扱っているに過ぎないと論じる。『後書』の主題が論証的知識である以上、問われるものの原因が探求されなければならない。しかし、Owenの解釈に従えば（c）には個物としてのSが存在する、

と答えればよいことになる。Owen 解釈の問題点は、『ニコマコス倫理学』第六巻第三章1139b19-24と『後書』第一巻第八章75b21-26から指摘される。これらのテクストでは、可滅的な事柄について論証がないと述べられている。つまり、個物があるか否かの答えは学の出発点ではないのである。[7]

それゆえ、Upton は（c）を日常的レベルと学的レベルの二つに区別することを提案する。日常的レベルの（c）は、その種の実例（instance）があるか否かを問うている。この日常的レベルの（c）は、学的レベルの（c）を探求する以前に学者によって前提とされている必要があろう。しかし、因果的定義を導くことができるのは学的レベルの（c）のみである。[8]

学的レベルの（c）の内実はいかなるものか。Upton は（c）が「SはPであるか」という形式を取ると解する。（c）はSが端的に存在するか否かではなく、Sが一定の仕方で存在しているか否かを問うている。たとえば、「人間は存在するかどうか」ではなく、「人間は或る動物であるかどうか」が問われなければならない。この場合、Sは第二実体である種であり、Pは「その事物そのものの何か」である。すなわち、Upton の解釈では、（c）において普遍的なSが本質的述語Pを持ちうるかどうかが問われ、そして、その問いはSがPであることの理由を示すことで答えられるのである。[9]

以上の議論から帰結する Upton の解釈は、学的レベルにおける（c）の問いは存在と「何であるか」が同時に答えられなければならない、というものである。「人間は或る動物であるかどうか」と問われ、それに「人間は理性的動物である」と答えた時に、すなわち、Sの「何であるか」を答えた時に、Sが存在することも示されることとなる。[10]

よって、Upton によれば学的レベルにおける（c）は（d）と同時に答えられるものである。

しかしながら、以上の Upton 解釈は二つの難点を抱える。

まず、Upton は（a）と（c）が「SはPであるかどうか」という同じ形式を取ると考える。しかし、この解釈は（a）と（c）の区別を強調するアリストテレスのテクストと整合しない。むしろ（a）と（c）は、前者が「SはPであるかどうか」と問われる一方、後者は「Sはあるかどうか」と問われる。前者に対する答えが「SはPである（あらぬ）」というものであれ

ば、後者に対する答えは「Sはある（あらぬ）」でなければならない[11]。

さらに、Uptonは（c）と（d）が同時に明らかになると解する。しかし、アリストテレスは（c）の後に（d）を問うことを明言していた。本稿ではこれ以降、このテーゼを「先後性テーゼ」と呼ぶことにしよう。Uptonの解釈は先後性テーゼに抵触する。

Upton解釈を参照することで得られる教訓は、（c）の解釈の妥当性を考察する際には、（a）と（c）の区別と先後性テーゼの両者を満たしているかをチェックする必要がある、というものである。

2.（a）と（c）の区別

前節で参照したように、Uptonは、学的レベルでの存在の問いが「Sは本質的述語であるかどうか」という問いであると解した。この解釈は（c）のうちにSと本質的述語という二つの項を確保することで中項探求の問題に答えており、魅力的な解釈であるように思われる。しかし、Uptonの主張は（a）と（c）の区別と先後性テーゼに抵触するため、そのまま採用することはできない。また、89b31-35に存在しない述語項を（c）へと読み込む解釈は、テクスト上の問題があるように思われる。（c）内部とは別のところで、Sと本質的述語の関係を確保する必要がある。

本節ではまず「名」の見地を導入することで（a）と（c）の区別を担保する。そのうえで、次節にて先後性テーゼを保持することを目指す。

アリストテレスは（b）と（d）の同一性を主張するが（II 2, 90a14-15, 90a31-32）、（a）「事実」と（c）「あるかどうか」が同じであるとは主張しない。『後書』第二巻の考察の進行に応じて（a）と（c）の区別が曖昧になることが仮に事実であるとしても、その事実は、（a）と（c）の違いを説明しない。

なぜ、アリストテレスは（a）と（c）を区別したのか。まず、（a）と（c）の共通点を取り出し、その後、両者の相違点を考察する。

たとえば、（a）の例である「月は蝕を受けているか」と問う文脈とは何か。それは、意見の不一致が見られるときである。「月は蝕を受けている」と考える人と、「月は蝕を受けていない」と考える人がいる時、どちらの意見が正しいかを決定する必要がある。このことは数学的な例を用いて説明されている。「矛盾対立する言明（ἀντίφασις）、たとえば「三角形について内角の和として二直角を持つかどうか」という言明については、どちらに説明（λόγος）があるかを探求する」（II 8, 93a33-35）。すなわち、意見の不一致があるとき、どちらに説明があるかを探求しなければならない。なぜならば、意見の正しさは説明があるかどうかに依存するからである。そして、この「説明」は中項ないし原因でもある。すなわち、矛盾対立する言明の真偽を判定するために、中項を探求する必要がある。矛盾対立命題は主語と述語から成るため、問う者は「SはPであるかどうか」と問い、SとPの中項があるかどうかを探求することになる。

以上のことは（c）についても同様である。たとえば、「神がある」ことと「神があらぬ」ことに、あるいは「ケンタウロスがある」ことと「ケンタウロスがあらぬ」ことに意見の対立が存在することは自明であろう[12]。

（a）と（c）は、いずれも意見の対立がある現場で問われる点で共通する。両者の区別は、意見の対立を問う形式に求められることが予想される。

Landor は（a）と（c）が互換的に使用されており、両者の区別は問いの文脈にあると解する[13]。たとえば、同じ月蝕についても、文脈に応じて「月は蝕を受けるか」と「月蝕はあるか」という異なった問いの立て方があり、それぞれの問いに応じて「月は蝕を受ける」と「月蝕はある」という異なった応答を持つことができる。Landor によるこの示唆は、アリストテレスが言語の使用に深い関心を持っていることを示すだろう。異なった問いの立て方とは具体的にいかなるものか。

「神はあるかどうか」や「ケンタウロスはあるかどうか」という（c）の例は、神やケンタウロスの存在について意見の対

立があることを示していた。意見の対立はあるが、しかし皆が「神」や「ケンタウロス」という名（ὄνομα）を使用している以上、そのような名で名指されるもの[14]があるかどうかを問うことには意味がある。すなわち、アリストテレスは学的探求にふさわしい対象を選り分けるため、名指されるものが果たして存在するか否かを問うているのである[15]。この解釈は、第二巻第二章における「夜はあるかどうか」という問いも理解可能なものとする。多くの研究者が困惑を示すように「夜」は実体であるようには思われない[16]。しかし、この「夜」が名に対応するものであると考えれば、そのように名指されるものが果たしてあるかどうかと問うことは理解可能である。それゆえ、この解釈は89b31-35に存在しない述語項を読み込む解釈よりも自然であろう。

（a）と（c）の区別は問いの形式の区別である。すでに主語項と述語項で形成されている（a）を問う人は、学的に問うという観点からより有利な立場にある。たとえば「月は蝕されているか」と問う場合のように。しかし、このことは（c）の問いの重要性をいささかも貶めない。なぜならば、われわれの問いは主語と述語で形成された問い以外にも、命題の中で主語として機能する名が名指す対象が存在するか否かへも向かうことができ、このことは第二巻第一章の探求論の観点からの包括性を示唆するものだからである。「月は蝕されているか」という問い以外にも、「月蝕はあるかどうか」という問いを予想することは可能である。

本稿は名の観点を導入することで（a）と（c）を峻別する立場を取る。

3. 先後性テーゼの保持

前節の考察で（a）と（c）の区別は担保された。本節の目的は、意味表示の観点を取り入れることで先後性テーゼを保持することである。

さて、前節で明らかにされたように（c）で問われているものが名指されるものであれば、探求論におけるアリストテレスの「名」への態度を見る必要がある。アリストテレスは、『後書』第一巻において、数学的対象の「あること（ὅτι ἔστι）」はそれに先立つ意味表示から証明される必要があると述べている（I 10, 76a32-36, etc.）。この問題意識は、以下の『後書』第二巻第十章においても保持されているように思われる。

> 定義は「何であるか」についての説明方式（λόγος τοῦ τί ἐστι）であると言われているので、或る定義は、名や、あるいは名のような他の説明方式（λόγος ἕτερος ὀνοματώδης）が何を意味表示している（σημαίνει）かについての説明方式であることは明らかである。たとえば「三角形」とは何を意味表示しているのか[17]。意味表示されるもの[18]があること（ὅτι ἔστι）を把握している時に、われわれはそれが何ゆえにあるかを探求する。しかし、それがあることをわれわれが知らないものについて、それが何ゆえにあるかをこのように（οὕτως）[19]把握することは困難である。その困難の原因は以前に（πρότερον）述べられていた。すなわち、われわれはそれがあるかあらぬかを付帯的な仕方（κατὰ συμβεβηκός）以外では知らないということにある。（II 10, 93b29-35）

定義の一種として「名や、あるいは名のような他の説明方式が何を意味表示しているかについての説明方式」がある。探求は、意味表示されるものが存在することを把握している時に、その根拠を探求するという仕方で進行する。しかし、意味表示されるものが存在することを知らない場合、根拠を探求することは困難である。

それゆえ、名とその意味内容が探求の始まりである。このことは、第二巻第一章の内容からも補強される。ポイントは、89b31-35において、「ケンタウロスがあるかどうか」と「神があるかどうか」という問いの二つの例が出された後、（d）において「神は何であるか」と問われるのみで、「ケンタウロスは何であるか」が問われていない点にある。「ケンタウロスは

何であるか」が問われていないのは、「ケンタウロスがあるかどうか」という問いに「ケンタウロスはあらぬ」と答えられたからである。名とその意味内容は存在しないものにも適用される（II 7, 92b29-30）。その中には、ケンタウロスやトラゲラポスのような虚構的対象も含まれるだろう。

以上の考察が正しければ、『後書』第二巻第十章は意味表示が存在把握に先行すると述べていることになる。いかなる仕方で先行するかが問題となろう。引用中の「以前に（πρότερον）」（93b34）は、第二巻第八章93a21-24を指すと考えられており[20]、そこでは、あるかどうかの付帯的な仕方での把握と「その事物そのものの何か」を把握することが峻別される。「その事物そのものの何か」の把握の例として、月蝕を「光の或る欠如」、人間を「或る動物」と把握すること等が挙げられている。93b29-35において付帯的な仕方での把握と意味表示されるものの把握が対比されていたことを思い起こせば、93a21-24で、意味内容の把握が「その事物そのものの何か」の把握と同定されていることは明らかであろう。また、ここで注意すべきは、不定冠詞「或る（τις）」である。「或る」という限定が付いていることは、その部分がプレースホルダーとしてさらに探求される余地が残っていることを示す[21]。たとえば月蝕の探求は、その原因が「遮断であるのか、月の回転であるのか、それとも消滅であるのか」（II 8, 93b6-7）という形で行われる。ここで想定されているのは、「その事物そのものの何か」を把握しているが、根拠を把握できていない場合である。

さて、Xの「その事物そのものの何か」とはXの「何であるか」の一部を指す。たとえば、月蝕の「何であるか」は「地球の介在による光の欠如」であるが（II 2, 90a15-16）、この定義から「地球の介在による」を除いた「光の欠如」が「その事物そのものの何か」である。以下、「その事物そのものの何か」を部分的定義と呼ぶ[22]。従って、『後書』第二巻第十章93b29-35における意味表示は部分的定義としての意味表示であろう[23]。

さらに、93a24-29にて、部分的定義としての意味表示と存在把握との関係が示されている。そこでは、付帯的な仕方での存在把握は存在を知ることではなく、従って「何であるか」を知ることにもつながらないが、他方、「それについての何か」

すなわち部分的定義を知ることは「何であるか」の探求を容易にすると述べられている。ここでは、存在把握の程度と「何であるか」の把握の程度が連動していることが示唆されている。

さて、（c）と（d）が同時に明らかになるという Upton 解釈のテクスト上の根拠は、「そして、この説明をわれわれが発見する時、それが無中項を通じてであれば、「そうあること」と「そうあるのは何故かということ」を同時に知る」（II 8, 93a35-36）であろう。Upton は学的探求におけるすべての場面で（c）と（d）が同時に明らかになることを意図している[24]。しかし、アリストテレスは（a）なしに（b）を知ることも、（c）なしに（d）を知ることも不可能だと考えている（II 8, 93a16-20）[25]。

93a16-20との整合性を取るには、（c）に答えることと（d）に答えることが別でなければならない。そもそも、アリストテレスが93a16-20の直後の93a21-24で部分的定義を提示するのは、（c）に部分的定義で答えることが（d）に答えることに先行していなければならないと考えているからであろう。たとえ部分的定義で（c）に答えたとしても、根拠を提示してプレースホルダーを埋めないかぎり、存在は十全に把握されない。Upton が主張するように、定義を言明すると同時に把握される存在は十全な学的な意味での存在である[26]。しかし、（c）への答えは学的な意味での存在ではないため[27]、（c）への答えは（d）の問いに先行していなければならない。あるかどうかを知ることは部分的定義を知ることであるが、「何であるか」を知ることはあるかどうかの原因を知ることである（II 8, 93a4）[28]。

以上の考察から、先後性テーゼは保持された。

4. 中項問題の解決

前節までの考察で、（a）と（c）を名の見地から区別し、意味表示の観点を導入することで先後性テーゼを保持した。残る問題は、（c）における中項問題である。（c）が「S はあるかどうか」という形式の問いであれば、（c）を問うことが中項を

問うことであるという問題へ何らかの応答を行う必要がある。

さて、Upton は（c）への答えが、本質的性質の把握と付帯的性質の把握の場合で異なると論じる[29]。本稿も（c）への答え方が二種類存在することには同意する。しかし、なぜ（c）への答えは異なるのだろうか。

本稿は（c）への答えが異なる理由について以下のように主張する。アリストテレスは、探求の道筋が（c）へ答える人と文脈に依存することを想定していた[30]。専門家がXがあるかどうかに答える際には、Xの「何であるか」を解明できる可能性はより高まる。たとえば、「月蝕」という名で名指されているものがあるかどうかの問いがなされるとしよう（（c））。この問いに天文学者が「月蝕は存在する」と答える時、天文学者は月蝕が「光の或る欠如」を意味表示していると考えている。すなわち、天文学者は「月蝕は光の或る欠如として存在する」と考えているのである（（c）への答え）。この段階では、月蝕の根拠＝中項は確定されていないが、光の欠如を生じさせる何らかの中項があることは明らかである。その後、中項が何であるかが問われ（（d））、中項が確定されることによって、月蝕の「何であるか」が明らかとなる（（d）への答え）。他方、天文学者でない人が「月蝕はあるかどうか」の問いに「月蝕は存在する」と答える時には、その人は「月蝕」という名の部分的定義ではない緩い意味内容しか持っていない。そのため、天文学者でない人が（c）の問いに答えた時には、付帯的な仕方でしか存在を把握していない。たとえば、「月蝕は暗い」のような緩い意味内容しか持っていない人は、月蝕の存在を付帯的にしか把握できていない。付帯的な仕方で存在を把握するにすぎない人はその存在の根拠の把握に進むことができないため、「何であるか」を問うことができない。

（c）の問いは、名指されているものが存在するかどうかの問いである。この（c）への答えには、名指されているものの意味内容が暗黙のうちに前提されていなければならない。（c）という問いの形式ではなく、（c）へ答える人とその文脈が重要なのである。そして、（c）へ答える人がSの部分的定義としての意味内容を持つことのできる人であれば、（d）を問う資格を得ることができるだろう。というのも、本稿第三節で見たように、アリストテレスにとって部分的定義は「或る」という

プレースホルダーを持つものであり、（d）の問いはこの「或る」を埋める根拠＝中項を確定するための問いだからである。中項そのものを確定できていない段階であっても、何らかの中項があるという認識を持っている必要がある。存在しない中項を確定しようと考える人はいないだろう。すなわち、（d）を問う前段階として中項の探求可能性を担保するために、アリストテレスは（c）を問うことと中項があるかどうかを問うことを同定するのである。この探求可能性は部分的定義を提示することで担保される。それゆえ、「SはPであるか」と明示的に問わずとも、「Sはあるかどうか」と問うことは中項があるかどうかを問うことと同義なのである[21]。

以上の考察から、（c）の中項問題は解消された。

おわりに

本稿第一節で参照したように、Upton 解釈は（c）内部にレベルの違いを設けるものであった。しかし、Upton の解釈は、（a）と（c）の区別と先後性テーゼを説明できない。

他方、本稿はまず（a）と（c）を名の見地から区別した。（c）は名指されるものが存在するか否かを問うているため、名の持つ意味内容が（c）の解釈に重要な役割を果たすことが予想された。その後、この意味内容の内実を分析し先後性テーゼを保持することを通じて、本稿は、探求の道筋が（c）へ答える人と文脈に依存し、（c）へ答える人の持つSの部分的定義としての意味内容が、中項＝原因を探求するうえで欠かせないものであるという解釈を提示した。

しかし、アリストテレスは意味表示のみならず感覚も知識の端緒として必要であると明言する（e.g. I 18, 81a38-81b9）。本稿の解釈に感覚はどのような仕方で関係してくるのか。

（c）では名指される対象Sが存在するか否かが問われ、その問いに対して、個物が存在するか否かを答えることになる。

Sを例化する個物を感覚できなければ、Sは存在しないことになり、そこで探求は終わる。しかし、Sを例化する個物を感覚できる場合には、普遍的対象Sの存在が示唆されることとなる。というのも、アリストテレスが『後書』第二巻第十九章で述べるように、「感覚は普遍についてある」からである（II 19, 100a17-100b1）。よって、（c）では普遍的対象Sが存在するかどうかが問われ、そして個物の感覚によって答えられることで、例化されている普遍の存在が示唆される。

無論、この段階では普遍的対象Sの存在は示唆されるのみであり、探求論の目的とする十全な存在把握には至っていない。それゆえ、Sを研究対象とする学者がSが存在すると答えた時、彼はSの部分的定義からSの存在の根拠の探求へ進んでいかねばならない。他方、Sを研究対象とする学者以外の人がSが存在すると答える時、彼はSを付帯的に把握しているだけである。付帯的把握から存在の根拠を探求することはできない。

以上の考察から、感覚は学的対象から虚構的対象を代表とする非学的対象を選り分け、かつ、問われている普遍的対象の存在を示唆する役割を持つことが明らかである。そして、この普遍的対象の探求が進行するためには、問いに答える人の部分的定義としての意味表示が必要である。それゆえ、感覚と意味表示はともに探求論になくてはならないものなのである。(32)

参考文献

Aquinas, T., (1964), *In Aristotelis libros Peri Hermeneias et Posteriorum Analyticorum*, ed. R. M. Spiazzi, Turin: Marietti Editore.

Barnes, J., (1993), *Aristotle's Posterior Analytics, Translated with a Commentary*, 2nd ed., Oxford: Oxford University Press.

Bolton, R., (1976), 'Essentialism and Semantic theory in Aristotle: *Posterior Analytics*, II, 7-10', *The Philosophical Review* 85, no. 4, pp. 514-544.

Charles, D., (2000), *Aristotle on Meaning and Essence*, Oxford: Oxford University Press.

千葉恵（2002）,『アリストテレスと形而上学の可能性――弁証術と自然哲学の相補的関係』, 東京 勁草書房.

加藤信朗訳註（1971），『分析論後書』，アリストテレス全集第一巻，東京，岩波書店．
Landor, B., (1980), 'The ei esti-ti esti Distinction in Aristotle's Theory of Science', Doctoral Disseration (University of Toronto).
McKirahan, R. D., (1992), *Principles and Proofs: Aristotle's Theory of Demonstrative Science*, Princeton: Princeton University Press.
Modrak, D., (2010), 'Nominal Definition in Aristotle', in Charles, D., ed., *Definition in Greek Philosophy*, Oxford: Oxford University Press, pp. 252-285.
Owen, G. E. L., (1965), 'Aristotle on the Snares of Ontology', in Bambrough, R. ed., *New Essays on Plato and Aristotle*, London: Routledge, pp. 69-95.
Ross, W. D., (1949), *Aristotle's Prior and Posterior Analytics: A Revised Text with Introduction and Commentary*, Oxford: Oxford University Press.
――, and Minio-Paluello, L. (1964), *Aristotelis Analytica Priora et Posteriora*, Oxford: Oxford University Press.
酒井健太朗（2013），「名目的定義と部分的定義――アリストテレス『分析論後書』における探求論――」九州大学哲学会『哲学論文集』（49），pp. 19-35.
高橋久一郎訳註（2014），『分析論後書』，アリストテレス新全集第二巻，東京，岩波書店．
Tredennick, H. and Forster, E. S., (1960), *Aristotle Posterior Analytics: Topica*, Harvard University Press.
Upton, T. V., (1999), 'The if-it-is question in Aristotle', *Aristotle: Critical Assessments*, vol. 1, pp. 101-117.
山口義久訳註（2014），『トポス論』，アリストテレス新全集第三巻，東京，岩波書店．

註

（1）Cf. McKirahan (1992: 189).

（2）この ἐπιστάμεθα を千葉（2003: 220）の「論証による知識」ではなく、高橋（2014: 455, n.1）に従いより緩やかな「知るということ」と解する。

（3）引用について、『後書』に関しては巻、章、ベッカー版のページ数を、その他の著作を参照する場合には著作名も含めて指示する

ことにし、訳の底本としてOCT版を用いる。なお、この箇所の記号による補足については、〈〉は原語を、［］は筆者による補足ないし説明を示す。以下同様。

（4）本稿はUptonの提唱する形而上学的レベルの（c）の問題に触れない。

（5）Upton（1999: 103）.

（6）Upton（1999: 104）.

（7）Upton（1999: 104-106）.

（8）Upton（1999: 106-107）.

（9）Upton（1999: 111-112）.

（10）Upton（1999: 112-113）.

（11）『ソフィスト的論駁について』第五章でも、「何かである（τὸ εἶναί ... τι）」と「端的にある（εἶναι ἁπλῶς）」が区別されている（*SE.* 167a2）。

（12）（c）が（a）と同様に矛盾対立命題であるか否かについては解釈を保留する。というのも、本節の議論のポイントは、（a）と（c）がともに意見の対立を扱っているところにあるからである。アリストテレスは通常、「SはPである」と「SはPでない」を矛盾対立命題とする。しかし、いくつかのテクストでは、「Sがある」と「Sがあらぬ」を矛盾対立命題と解する余地がある（e.g. *I* 2, 72a18-24; *Top.* II 1, 109b19-23）。

（13）Landor（1980: 7）.

（14）名指されるものが普遍か個物かという問題については、本稿「おわりに」を参照。

（15）（c）の問いが名に関係するという解釈の示唆は、加藤（1971: 812-813, n. 3）から得た。

（16）Ross（1949: 613）, Tredennick（1960: 177）.

（17）Ross（1949: 636）に従い τί ἐστι を削除する。

（18）Charles（2000: 23）.

（19）οὗτος については、Bolton（1976: 539）は ὅπερ ἔχοντες ὅτι ἔστι（93b32）を指すと、Barnes（1993: 223）は名目的定義のみを持ってい

る状態を指すと解する。本稿の以下の論述は Bolton の解釈に従ったものである。

（20）Ross（1949: 636）, Barnes（1993: 223）.

（21）千葉（2003: 250）. Bolton（1976: 529-530）は『自然学』第一巻第一章を援用することで、この τις が感覚によって与えられるものの徴であると解する。Bolton はそこから、意味表示が個々の実例を前提にしなければ成り立たないと主張する。Bolton の解釈では意味表示は存在するもののみ適用されることになるが、アリストテレスは虚構的対象にも意味表示を認めている。

（22）Cf. Modrak（2010: 257）. また、酒井（2013）では、数学的対象についてのアリストテレスの考察を参照することで、部分的定義と意味表示としての定義（名目的定義）の役割を重ねあわせて解釈した。

（23）部分的定義とは定義対象Xの「何であるか」の一部であるため、たとえば93b29-35における「三角形」という名の部分的定義は「或る線」のようなものと考えることができる（cf. I 4, 73a34-37）。

（24）Upton（1999: 112）.

（25）確かにアリストテレスは93a16-20で（a）と（b）が同時に明らかになる可能性を排除していない。しかし、（a）と（b）が同時に明らかになることと（c）と（d）が同時に明らかになることは別のことである。仮に二つの組を平行して解することが許されるとしても、Upton のように（c）と（d）がすべての場合において同時に明らかになると考えるのはやはり無理があろう。

（26）この解釈の源流は Owen（1965）に求められる。ただし、Upton（1999: 112-113）自身も注意するように、Owen は存在と定義が同時に獲得されるケースを数学的事例や時間や場所のような抽象的概念に限定している。

（27）（c）への答えが存在の不十分な把握である部分的定義であることを指摘したものとして、Modrak（2010: 257）を参照。

（28）Bekker の τί ἔστι ではなく、OCT の εἰ ἔστι を読む。

（29）Upton（1999: 110）.

（30）以下の議論は、アリストテレスが、知識論の背景に専門家の一定のコミュニティの存在を想定していたことを前提としている。『トポス論』においてアリストテレスは「ἔνδοξα とは、すべての人に、あるいは大多数の人に、あるいは知者たちにそう思われていることであるが、知者たちに思われている場合には、すべての知者か、大多数の知者か、最も著名で評判の高い知者たちに思われている場合がそうである」（*Top.*, I 1, 100b21-23）と述べる（訳は山口（2014）に従った）。ἔνδοξα を「定評ある見解（reputable

opinion)」と解することが許されるのであれば、アリストテレスによる専門家のコミュニティの想定を本稿の議論に援用することは、理由のないことではないだろう。無論、『トポス論』のテクスト解釈も含めたἔνδοξαについてのさらなる考察は今後の課題である。

(31) Aquinas (1964: 323) は、(a) や (c) を問う人は、結果として中項があるか否かを問うているのであり、それらの問いが中項のアスペクトのもとで (sub ratione medii) 問われているのではないと明言する。そもそも Aquinas は (c) の中項探求を問題とみなしていないように思われる。

(32) 本稿を作成するにあたり、初期段階から、松浦和也氏（秀明大学専任講師）に多くのコメントを頂戴しました。松浦氏に心からの謝意を表します。

（本学大学院博士後期課程・哲学）